雅俗
名義抄

俳諧多識編下

天爵堀内先生口授　不溢門人杉二全筆記
無隠菓撰馨

鳥之部

閑古鳥（カンコドリ）　いうまでもなきものや　曽て葛俳（カツシカ）お
たりみくにかうもあり　なくとも多き杜鵑（ホトトギス）　大キ
めて黒き　掬（マダ）　あるの家　伏見くらまこと山人有
和何ても寂寞（セキバク）の事　俳諧千里の外ん　こゝもあり
答曰志うんこゞり　伽藍の國こその
栗（アハ）ゝき多甲州　至（マメ）ゝ　ゞり東國中てハ

豆蒔鳥ちどゝいふ鳥なく此鳥の啼声をきゝなす
豇豆粟蒔をまつ〳〵によりて此名ありとぞあり
漢土にては郭公といふ是和漢同名也本艸綱目
鳲鳩といふ詩経の鳲鳩も此鳥也又布谷といふ
布穀といふ俳諧に布穀の字哉用ひてかん
こどりとよめるハ正字也郭公此字ハ古よりあやまり
来りて訓しきたれるなり改むる事あたはず
和俗の謬名と相違するなりおよそ此ほか一二にあらず
ていふ也又鳴鳩をつゞりと訓ぜる説
説もあり用ひがたしかつこふ鳥と思ふ人も

ほとゝぎすも是を別名とす又杜鵑鳥と書て
鳥と訓するも何れ是も誤り也貝原氏も
此鳥を杜鵑鳥とし是等を鵑鳥ハ和名
おもふこどりといふ呈卅騒列すと杜宇ハ此鳥なれ
啼聲によりてうぐひすとよぶといふ
鳥の大サ鴿程にして背中黒くちいさき白き
星あり鳴声ハ沐簡のごとくなれば
よつて簡鳥とよぶ漢名ハ詳ならず
いづれもかんこどりの疑鄙に通ずるものなれる
かんことりとハひとつ別なるもの同物といふ

人あまたもて支ふ古書ありしと又は奇
河南府志に一名呼蚊蟲といふ蚊虻に似て多
く蘭山翁ハ書名水子など方言に蚊ブンといふ多
く烏ありて能人語をもまねるもの多ハ雅鳥の大サ
して赤冠小ハ大赤白き星あり羽長小ハ大赤
色の星ありて頭より脊ハ毛ありて脊の筋
あり嘴声ハ蟇に似たり牧竜吐ありて呼蚊
虻出て蚊を食ふといふも此鳥の
轉ずるにハ大低蝙蝠の事と西人色
事ありとぞ

古書ありしハ蝙蝠のなを誤りの伝名
なり正しき名ハ伯日竹虎ノ毛ありて
陽諭蚊母鳥ハ筒多
鷺鷥ハ多くて
蚊虻を好ハ
常の如くなりみさくして
きやうなるものごとき黒き羽
頸ハ毛冠細長くして尾ハ
事ありまたこの
雌雄相雜

鴛鴦の情ふかき事を云ふ又云ふ多八本州也
鸂鶒（イソシヾ）と云紫鴛鴦（レンワウ）央鳥（アウ）と云鴛鴦と別物と見ず
三種程あり
翡翠（ヒスイ）を川蝉（カハセミ）と訓（よ）んだ翡翠八和名やま
せみ又みそさゞい（ミソサヾイ）又みそさゞいを
ゑとりすめ色赤きをもて廣東（クワントン）新語八
紅翠（コウスイ）と云川せみ八黒（クロ）き斑（マダラ）あり翡翠と云
わかづま別（ベツ）に毛あり其文字古（イニシヘ）より用ひ来れり
今さらにめでも珍（メヅラ）しけれと称（トナ）へて信鴈（シンガン）
従（シタガ）ふ八雪（ユキ）降（フ）る時八友（トモ）て通信（カヨヒ）よく害あり

寫苔字

鶺鴒（セキレイ）孔雀（クジヤク）をはじめ
の鳥（トリ）ともの曲（クセ）
やすく訓（よ）ぜしほの字正字やや
問鴎（トヒカモメ）ともの字正字やや
答和字（ワジ）多（オホ）くは田沢（タザハ）より第（ダイ）と名（ナ）に
動（ウゴ）かす去（サル）心故（ユヱ）古（イニシヘ）より鳴（ナク）物（モノ）と云歌人（カジン）
好（コノ）んで用（モチ）ゐ来（キタ）れど鶺鴒（セキレイ）の字（ジ）
用（モチ）ゐ正字（セイジ）とすべし
あれハやまとうた（倭歌）の品数（ヒンスウ）甚（イト）多

そのうち尻白(カレシ)ちぎと云ふ
今りの之又ま毛ちぎもあるそーぎ一名
かやこともかやくきちぎ面ともちぎ同名二種あり
女ちぎそーぎあり一名きびしめたいちぎ一名きびしちぎ
二種あり黄足(キアシ)ちぎかーとちぎくびしろーぎ
三種あり大首小首もーぎ首ーぎ十ちぎ
うそそーぎちぎくーぎこ種あり一八大物(クイモノ)ちぎ
一名だびそーちぎ一八中物(シャクリ)ちぎ一名つるちぎ一八
そりで志ぎ一名小つるちぎこうでーぎ一名山
ちぎ鴨(カモ)一名かそ一名金(コガネ)ちぎ尾羽(オバ)ーぎ

大勝(オオガチ)しく田ちぎひるちぎ
やうーぎちぎてりがもちぎぎ一名
ぎ猪(イノシシ)ちぎ等の数種多ー
問鴨(カモ)鳧(アヒル)の名正ゆうれハ
答古ふ筆記しある
非(ア)ん鴨(カモ)ちのハ鴛鴦(オシドリ)の事にてあひるへかもハ野(ヤ)
鴨(カモ)ちふ是之あく鴛鴦(オシドリ)ちふ
鴨(カモ)ちそりいの時ハあひるのやにあるもの牡猪(オシ)
いの時ハぎその事ハ豕(イノコ)猪之猪(イノシシ)といの
ちと洲しまるちふ之又鳧(アヒル)とけあちふ訓ちふ

ふくろ名ハかめのこ訓せる
ハ非也と
つの亀ニ一古分
まがたの事ニ
かくろぐれバ曙を水札(スイサツ)と訓する
又非ず案訓蒙(キンモウ)字會に水札をみづふだ
鷄(ジツ)の一名ともす又あひるを音のみと
問未(ボツ)免(トン)とくづくと訓せ正字ならや
答和名ずり日本紀ニ木菟(ツク)とかゝり毛ふ
又非ず倭名(ワミヤウ)類聚鈔ニ
一名鵂鶹(キウリウ)本經逢原 梟(キヤウ)ニ
夜猫子(ヤメウシ)盛京通志 猫頭鳥(メウヅヨウ)五雜組

あぢいづゝのゝ訓ハ正字ならや
事ニ
問巣(スク)をすゝくろと訓せ正字ならや
答古ふくろとハ本名ハ鵂(ケウ)ニ云是ニ和名抄ニ
きけと梟(キヤウ)とつけたり正當ニ
きけと梟とつけたりまたり又みゝづくとあり
歌ニ緑ぎり又かみつきとをとりとハをしへるのゝ
向水鷄(スイケイ)をくゝみと訓せ正字ならや
答古来より通用の文字ニして
もおもれハ正字ニ云ふきかや日本紀ニ水鷄を

くゐなと訓しそれ河間府志に姑丁(コテウ)状如鶏
又名水鶏(ミヅドリ)と云りめくゐなに似て
阜氏藻林(クロシソウリン)こゝに出たり水雞(アヒル)の名あり
蛙(ニハ)を驚(ベツ)ともす水雞(アヒル)なりや
問鶏(ニハトリ)をうとく例ぞ正字なりや
荅非ず鶏(ニハトリ)ハ鶏鴨(アヒル)ともいひて和名くぐらんてう
又れんどてう
うとハ大きさに違(タガ)へりうハ漢名鸕鷀(ロジ)と云のちがひ和名抄こゝも出列ぜハ出まつと呼(ヨブ)古名のよし
島津(シマヅ)く住と

やまもゝ鶏冠(カイ)の海(スイ)ばう浅州よありとくどく濃州(ノウシウ)岐阜(ギフ)を中人の功(コウ)まで甚精功(セイコウ)ありめハ一人まして鶏中四五隻(セキ)をはう者あり事作名ハ又岐阜に用る所の鸕鷀(ロジ)くらんごう等の名あり鵜(ウ)を用るこゝを捕(トラ)もるにいこまぐらを用る事(コト)ハ鵜(ウ)の字(ジ)を用ゐるこゝ従(シタガ)ふべし
あらまし南事(ナンジ)ハ本字(ホンジ)に

面白(おもしろ)かるべし捌ける鶏縄式　ろ之紙
此句もよく功者(くくみ)の数寄の縄(なは)をたゞこしらへ
ゆゑに遣(つか)ひ捌(さば)くを称美(せうび)したる句なり
扨また云ハ三足といふ事是ハ鶏の数鷄
鳥の云ハくまへと云ハ足の数とかぞへたりて見る
鵜がらにハ二羽を一手といふ足手といふ時ハ
八羽を半手なり八羽以上ハ上手と称する
よし也なり

問　よしきりといふ鳥漢名正字ありや

答　漢名剖(ほう)葦(い)鳥(てう)といふ也剖ハ割拆(わりさく)といふ義也
葦ハよしといふ字なりてよしを剖(わる)と云事によく
して此方のよしきりといふ名とよく合へり
畿内及勢州辺にてハよし原雀と云之又ハ
雀といふ葭(よし)割(わり)雀(すずめ)といふの類しるべし葦
を喰ひわりて其中の虫を喰ふ故に此名
ありと石川丈山が詩之四季九州辺にてハと
ぎやう〳〵しと呼なり加賀にてハよしきりと
いふ仙臺にてからしと云東国にてよし
きりといふ之俳諧にハ行々子(ぎやうぎやうし)よしきりを夏季とす
用ひ行々子と書ハ借字(かりじ)なりて此鳥の声也

仁義

かくひすゝきもろこしの
蘆葦蒹葭茂の文字 總こうとも
洲ぎ亀一二の
組来前の後くこそ
問蕫鳥鸛鷺鷲鸕の文字を皆うぐひすと訓を
そもそもよく終こそ
答その四名皆朝鮮
本邦のうぐひすとはすこし
もり此文字をうぐひす訓にきりて
今は通用のみなりわれいうを改め

如此一その実を物解てより青一持添り
ホロハ微黒まで
大きく駱駝の
華び貝の通り頸
中を黒色二尾の
鮮まるこ
鳴くそのうぐひすの
名雀が蛇島へ
此鳥朝鮮へ近き

島(シマ)も多(オホ)くあり桑(クハ)椹(ノミ)を攀(ヒ)する時(トキ)の
事(コト)を翁(オキナ)の集(アツ)めまく本艸啓蒙(ホンザウケイモウ)に一名(イチメイ)
かくぐひすといひ又(マタ)鶯黄鳥(ウグヒスワウテウ)鸝(リ)の字(ジ)を借(カリ)用(ヨウ)ありと知(シ)る
べし扨(サテ)又(マタ)枕草紙(マクラザウシ)に見(ミ)えたる春鳥(シュンテウ)清山(セイザン)
記月令廣義(キゲツレイカウギ)に先(サキ)鶯(ウグヒス)報春鳥(ホウシュンテウ)と書(カ)
紫鶯鶏(シケイ)とあるを清俗(シンゾク)八
源氏物語(ゲンジモノガタリ)にも萬葉集(マンエフシフ)に春鳥(ハルドリ)と書(カ)
和名鈔(ワミヤウセウ)に春鳥(ハルドリ)を春鳥子(ハルドリノコ)と訓(ヨ)
問雲雀(ヒバリ)をひばりと訓(ヨ)ませ正字(セイジ)如何(イカン)

答俗字(ゾクジ)に漢名(カンメイ)八告天子(コクテンシ)と云(イ)ふ三才圖會(サンサイヅヱ)に潛確(センカク)
類書(ルイショ)にも出(イ)でたり江陰縣志(カウインケンシ)に一名(イチメイ)噪天(サウテン)と
見(ミ)えたる事(コト)も和名(ワミヤウ)抄(セウ)にて明(アキ)らか
問百舌鳥(モズ)をもずと訓(ヨ)ませ正字(セイジ)如何(イカン)
答百舌鳥八もずに充(アテ)らず俳書中(ハイショチウ)多(オホ)く用(モチ)ひ
一書(イッショ)ありて今(イマ)八(ハ)ぐさ又(マタ)歌(ウタ)俳(ハイ)ともに鵙(モズ)の字(ジ)を
用(モチ)ひてもずとよみ来(キタ)れり 貝原(カイバラ)の大和本艸(ヤマトホンザウ)
の説(セツ)に従(シタガ)ひて時珍(ジチン)の説(セツ)を用(モチ)ひ伯勞(ハクラウ)と

ものを鷓（シヤ）鴣（コ）音の字を用ゐ伯労（モズ）の一名なれば両字ともに知るべし

同鷭（バン）とも字作ものや

答鷭は濛字之鷭鳧（シウ）又鶖鵬（コウ）あるも考ふるに説文に形状（ケイジヤウ）水鳥青黒色と出たれば青鳧（セイフ）のごとくにして山鳩のごとくなるものや青鶴（セイカク）の音を假借（カリ）て用ゐたるものと思ふ字正字かあるべし邦俗の通字なるべし

鷸（シギ）大小二種あり小鷸一名梅首鶏（バイシユケイ）と云仙雅筆記

清俗は田雞（デンケイ）と云此名臺灣府志より出たり

大鷸を百鳥圖に知るべし

問伊勢物語に都鳥とあるものやもり鷗（カモメ）ならや

答歌学の秘書には鷗とあるも別物なり隅田川の名産なれども

事を挙（アゲ）これも鷗にあらず別物なり

近く見ざれば分かたきも別物あるべし萬葉に

鴨妻（カモメ）加萬（カモメ）目と書るを呼びて江州にては

あかうどりと云江湖（カホ）に多く棠（ヤナギ）に集（ツド）ひ

漁浦（ギヨホ）に群聚（グンシユ）して喙（クチバシ）赤く脚も

引時ハ奥の水上ニ跳上るものを取り食ふ
形鳩より大ニして
共ニ赤色なり頸
江鷗とも海鷗ハ和名おなじ一名うみ
中国ニハ稀ニ
ハ肥前ニて
どりと云是
ども云ふ
奥ニてごめ
ども云ふ
ハ形江鷗
大ニして紫褐色
ものにより潮の
妻ごふくともに
猫の事ハ
ハ形路より大ニして全身白灰色ニ黒斑
あり觜脚共ニ
赤くして黄色翅
又大灘
ハ鷹かゝりて大鳥ニ翼を張れ
バ六尺余もあるもの

あるをかりめ磯かき等をつそちどり河口(カワグチ)保食(ホジキ)
すゐ代都鳥とりつのごとくにて脚(アシ)
追而(オッテ)雛(ヒナ)ハ
圖ニ水喜鵲(スイキジャク)津浦(シンウラ)縣志に呼潮(コチョウ)とあり又千鳥ハ清余曾三(セイヨソウサン)
訓もあり詳(ツマビラカ)ならず
うそちどり うハちどり うきあみ
きんぐちどり へらちどり こさ
ちどり いうるちどり うつくしあみ こちどり
むなぐろちどり めだいちどり おゝ都鳥を

流布(ルフ)に冬季とあり
夏春うかゞふ(ウカガフ)事 延寶四年 杉村
きあうちどり 世(ヨ)
備後(ビンゴ)
備ぐしまいつぎり 又むぐつきり 国(クニ)
いちやうつぐり 阿(オ)
ちん。遠州(エンシウ)
いとまごそ鳴
名ハ鵜鶘(ウテイ)
同場をかゝと訓(クン)を俗(ゾク)
没入(ボツニウ)すると
つゞく事也(ナリ)
づゝき
仙臺(センダイ)
食物(ショクモツ)本艸(ホンサウ)
水胡盧(スイコロ)

駿河なるひがたんことよぶは同意之古名
なり和名鈔上総まておかと云濃州なるな
ことなり也江州琵琶湖に最多しまて
鳰の海ともいふ形小鴨に似て肉中臭
氣ありて食ふべからず痔を病人腸と血と
を避て羹て食へば痔に妙之腸血悪臭あり
て食し難し信州にてはみほといふ
此鳥水中にもぐりて人を見る時は水中へ
没して妙に足あるとなり上野にて
かくぐる故と云之水中をくぐりて巴をなして

免ぐる多くの名あり此鳥中も水鷲の名有
本艸正要に見えたり又鳰の浮巣といふは
名物鈔に建春門院の殿上の哥合に頼政
水鳥近馴といふ題にて
子を思ふなみのうきすもみえぬまでとすれ
見ゆるもわれ此哥めづらしとてかちに
祐盛法師是を見て大きに難していはく鳰の
のうきすみゆるとみえしとぞうの巣は
なりとあり無きりの事になし海のかれば
立ちのる物あれば消きえりてまたの浮巣を

さゝ浪ハあしのくきを中にこめて志らもる玉ハ
くりかけてぬきりにひとつきハ志づこそハかなく
あられ志づひまハ志づくひそくだるこゝろもくふ
雨さへありつゝにハ風ぬきがいつくともなくみれ
いそぐ大浪(ナミ)くそくだくかぎり人々もしこそしれぬべし
きれとも霞に志れる人あまりけるまゝきりうちに
定(サダ)めらるべくりればいふにハなしとぞ中侍り
しと云こと此おわすしてつく別に弁(ベン)を用ひぬ

問 鶍(アヂ)村鳥(ムラトリ)又 列鳥(アヂムラ)とらふまゝぬ何

答 むかしのもつらと云ハ小鴨のかたち村しかたちなるを
いふ之村千鳥のごといふ村と同じ小鴨一名ひぢ
一名たかべ又たかべともいふ並羽にしてをなが
がもと云 鴻るといふ六种にして冬に出正字
とあり正字通にいふ而しかり鳧(ハシ)鳧といふ是也
又刀鴨(ヨシアヂ)と云正字之鶍(アヂ)ハ和字にして鰺(アヂ)正字と云
字より作りたるなるべし 列鳥(アヂムラ)ハ啄木鳥(タクボク)の
事にして和名てらつゝき一名きつゝきと
いふなるのよしなり勧(ツトメ)て假名にて書べし
鶍村ハ和字なるをもちひてもよろし 列鳥ハ
語の義用もなし 決

問鯣ハ正字有りや

答崔禹錫が食経に出たり形状を詳らかにせず

者畧して

又鄭望う膳夫録に曰く鱐ハ鯣鱸次之云々若水の説なり

れハいつもこゝに定めうべし鯣をあかめと訓する

事久し日本紀にハ乎奇女とかゝるハ是なるべし

へいけと称す則乎奥の称呼なるへし

鯖鯵ハいつれも武云吾邦往昔周防國より始て

産出奥故ニ周の字を用ゐしより後説

ハやうもあれども字義ハ大既未

詳一概ニ添難しと雖も倭用より

久字とするべし一漢名魚辣鼈奥とも

八閩通志漳州府志ニも諸書にハ見えず

一名ハ吉髪蠣一名ハ髭吉髪蠣一名

過臘奥一名臘奥ともに数名のみ又鯣ハ

好物にありて俳諧にもあり

揚ものにたいそうよし大奥ニてハ小鯛ともいふ
海川を限らず大中ともに多し冬ハ脂ありて
形勝れかし最上ともする事ハ奥川ありて其
割レイト訓ともいふ又桜鯛ともいハ堺湊に集る
ものをいふ事也桜の花盛の頃
故名ありと要薬鯛ともいハ中国筑紫
四月出る時をいふ此の魚ハ津の国
にて桜鯛ともいハ摂州西のみ社辺の海にて
取る故の名ともいふ奥にてハ
黒鯛ハ赤鯛よりハ劣る形ありともいふ
九州にてもいちぬ鯛ともいふ
多く出る故ニ但し黒鯛ともちぬ鯛ともいふ
同じ事也しまつなれを多く混じて
種ともいと物類稱呼ニいハく又小なるものを
かいづゝ云泉州貝津辺にて是を魚問ふ名
ともいふ黒鯛ハ漢名烏頬魚也茅渟

鯛ハ海鄉之ト若水ノ説之甘鯛ハ方頭魚之
前ノ方ヨリ人ニ赤髯ノ如キ物アリ野必大ノ説之
皆南書ニ出タリ
麥藁鯛ハ黄穡魚ナ
ルベシ
問鰹魚ノ文字ノ儀ヤ
答洞詮類要ニ曰鰹魚一名肥鯖魚其形圓肥尺
而多肉少骨大者自尺及二尺色青黒南
人以芥子醋食為常醢醢當佳云
ホレバ正シキ文字ノ順和名抄ニモ鰹
和名カツヲト訓源順ハ人王六十二代
村上天皇ノ時ノ人ナレバ其ノ時ノ人ノ著ハシタル書ヲ
又松魚ト書事ハ古クヨリ有ケルヲ
是ヲ先輩カツヲト訓ヲ疑ヒ
府志縣志類ヲ形ヲ訓ヲ
トモ定カニキ証アリ東醫宝鑑ニ云松魚性平
味甘無毒味極珍肉肥色赤而鮮明如松
節故為松魚ト生東北江海中ニ此ノ説ノ
ても疑ハシキニ
又東北江海中ニ生ルヨリ
鰹ハ南海ノ産ニシテ

氏もいくたり輩着肴も松魚の鮓かあぶる
津とのづまもたり誉て朝鮮國の醫師
金徳命ふねの形状を問れるに答云松魚ハ
全身か細鱗ありといつを問く考まばきみ
のあやかりものと蘭山翁も松魚をさけ
為ともりきけハ事扯江浦の産にて
南海ともし性も事多のみてくく
血を補ふの功あり又鮭のごとくに到ず
きや鮭を難雖ども河豚の
ごとくにくれか河豚の
毒藻ハ一ツ

話もあんどう重魚と混じて區くなれを
區うくと過膳奥をさけ到ずるも亦區
けものと鮭のごとくに毒ハ
水府にてハ鮭の字を用ひ他くもさるやなれとも
右のごとく用ひ来れハ西山黄門の博覧より出て
正しき文字ともいふべし食経に鮭魚其
子如苺赤光ルとあれハはくごにあるべし
苺とハいちごのごとし此文字簡易ゆく

俗通ずること文字あるべからざるの地又鰹(ケツ)魚の字あるに至りては別物なるべし

問ひていはく江州にて京大坂にいふごぼう又いもぎ

答京大坂にいふごぼうを江州にてごぼう又いもぎ

ごぼうと云漢名抱石魚南産志に出づ彦(ヒコ)根にて

越ふかくして上總陸奥にて津ぶかいと云根掘及伊豆駿河

津ぶかいと加茂川にてごぼうと云

漢名杜父魚と云是ごぼうの方言也用ひてごぼうと云ふごぼうにて

石のごとく形ちまるく扁(ヒラタ)にて背ごぼうと云きりうごぼう

甚水主(スイド)にすむ形大小の

有といへども一數別名多し

ぜと又叶品數之社魚水湖沢に生ず常に

ふ色沙上に浮游(ウカ)せず長サ六寸有

いろ多形いまもぜの如くして肥て大なり

大頭(ヒロキクチ)にして扁(ヒラタ)く細鱗(コマカレコケ)あり色漆(ウスキ)黄

よ黒きにうりて星あり肝毒あり
よくく叫(サケ)ぶ角(ツノ)且暮(ユフベ)にハ鳴くく甚よくハ渇(ニゴ)りて
蛙のごとし故くかび
ありくく但(タヾ)玉あるそのそ
川の流くに住くく河鹿(カジカ)と云ものあり谷
清冷(セイレイ)なるにハ住ねりのごとし
よく多し杜父魚の河鹿と同日の論ありて
魚虫の差別あるよそ
よく閑静(カンセイ)にして
性よく穏(オダ)しやかなるものなり
茶色と黄(キ)とのまだらあり長ハ
山蛙(ヤマカハヅ)のごとく谷川に住りのごとく薄(ウスキ)錦襖(キンヲウ)
子(コ)と云古歌にハ詠(ヨミ)けり
俗(ゾク)又ハ川の清水に住
山蛙(ヤマカハヅ)より無斑(ムハン)にして
ごとく俗(ゾク)に岩蛙(イハカハヅ)と云
わくくハ鉦(カナ)鼓の音にハ似たり
稱美(ショウビ)して近年ハ
一説ハ歌(ウタ)に詠(エイ)ずるものなし
考(カンガ)へべし又杜父魚

古きことわざや源氏むらさきの巻
川のぼり卿(ノボリノカミ)あそんの道遠(ミチトホ)しの事
何海松(みるめ)かちらき川よりは
又下加茂紀(シモカモノキ)の歌共をとりて妻こと又加茂紀
味噌(ミソ)こしてごり汁と名付(なづけ)て
の五人はごりを鮓(すし)とやせ
牝(メ)の鮓とつゞまり又本者(もとは)の誉(ほまれ)
作家の倒書(さかしまがき)ありて年を経(へ)枝(えだ)ごり
名鮓(なずし)と化(け)ちうつり
いつゝあの本

味噌摺(ミソスリ)に添(そへ)まき鮓のをとぎ話 嵐雪
笔(ふで)は加茂川の石鮓汁の縁向(えにし)俳書に鮴(ゴリ)
のさま狂用(きょうよう)雷魚(らいぎょ)の字(じ)をかりて川(かわ)
是(これ)も和名(わみょう)抄(しょう)に加賀(かが)の産(さん)雷(らい)魚(ぎょ)鮓(すし)
鳴(なる)れば加賀の産雷魚鮓(すし)の有(ある)
是(これ)はいちごのまゝにて
もてはやす鮴(ゴリ)は泥鰌(どぜう)の事(こと)にて
杜父魚(かじか)をかく正字(せいじ)
鯒(コウ)と書(かく)てかじうと
笔(ふで)は崔氏食経(さいしょくけい)の和訓(わくん)より

このもの常に多く海中にあり又かく
かつといふものハ北海にて雪霰(エラレ)の降る時肉腹(ハラ)を
よこたへてその上を泳(ウカ)ぐ魚之(ノ)ことく漁猟集
下

かく蜘(クモ)や腹をあぐべて降る霰　拙候

角鮭(カクボツ)の字仮用也(ナリ)を俗に石鮒(ゴリ)と書ハ
雅文(モジ)なれハ俗まゝ斗(ト)云がごとく温故日録
に魦(サヽ)の字を用いてかくと訓せしハ非之(ノ)別魚之
問鯊(サヽ)をこのもの之訓せしやうきや
答陶書に鯊魚(サヽギョ)とあるハこのもの正字なれど

ま[illegible]魦(サヽ)と字(ジ)俗用(ツカ)ふ倩(ツラ)ら考べし
但し記(シル)せる書ハ見ず鱮(ヨウ)の字をもちゐるハなほ
うべし鱮魚ハ別物之(ノ)和名詳(ツマビラ)かならず
鯊(サヽ)とつゞまりて書字(カキジ)なるべし
ろくでなしの略(リヤク)ならんもうきや
問鮎(ネン)鮴(ジョウ)二字(ジ)よみあやまりやすし
答楊氏漢語抄曰鮎魚(ネンギョ)一名細鱗魚(サイリンギョ)奥州(オウシウ)にて
魚の一字之(ノ)鮴魚ハ和名ちがひ
俗(ツネ)にかりかり鮎(ネン)鮴(ジョウ)同音也　鮴(ジョウ)ハ和名やなぎ

又記用魚又細鱗魚ト云崔禹錫ガ食経ニ
一名年魚ト云春生夏長秋衰冬死ヲ
故ニ名一年魚トモ云ヘリ又日本紀ニ素魚ヲ書
ケルアリトカヤ是ハ俳ノ年魚ノ字ヲ誤リ
用ヒシ事ナルベシ
問鱚ヲトヽ訓ヲ如何
答恐ラクハ正字ニアラズ俗藻名ハ杏魚ノ又
大口魚モアリ東醫寶鑑ニ谷口大口魚
性平ト味鹹無毒ト食之補ル氣醒ル睡ト暗味ヲ
佳ニ生ニ東北海ニアリ腸ヲ腸ヲ味ヲ

ざやうに書きて
ふやうにみゆるは
又あうだなどと云ふ
るりの友ゝまきて
品數のこゝろのやう
用ゐるには又鮓とも
うとも楊氏漢語抄
出所詳ならず
一名鮠ハ古ヘウ用ひ事ありと
いふとぞ漢名ハ番魚ト云温州府志
漳州府志一名ハ溪鰡

ともよハかり 俗ニ雪鱒（ユキマス）の事ニ
ていふ 朝鮮國最多（イトオホシ）ト云 鱒（ハイ）の事
ハまれハ用ひそれ 北國ニて多き事
ハ雪のごとくあるよし 雪の降（フル）ときハあれ
ハ雪のごとくあるよし 雪の降（フル）ときハあれ
問 鱒（ヒバク）ハ 正味（シヤウミ）よきものや
答 淡水ニ産（サン）ス 海（カイ）ニ入（イル）ことなし
ゆへ 弱（ヒバク）の字ニ作（ツク）ル 薄名鰒（ウスナマコ）ともいふ
圖書（ヅセウ）ニハ又海鰒（カイフク）ともいふ 溪鰒（ケイフク）ともいふ 多（オホ）キ名の一名
かくて和名あるゆへ云ハ女の詞（コトバ）なり

問 鯉（コイ）を 刺身（サシミ）ニして正味（シヤウミ）よきものや
答 淡水（タンスイ）隠居（インキヨ）の本仲（ホンチウ）の位（クラヰ）ニ鮭（サケ）魚ニ次（ツグ）ク
鮭魚（サケ）ハ和名あれども 疑（ウタガ）ハしきゆへ
楊氏藻（ヤウシサウ）諸物（シヨブツ）よ鯉（コイ）和名ヒシコイハシ小鮎（ヒメ）奥
にもあり 又 多（オホ）き事ハ 此ハ漢種（カンシユ）物の位（クラヰ）よりも
多き鯉（コイ）又ひしこいハ一類（ルイ）ニして別
物（ベツモツ）ニ相違（サウヰ）及西國（サイコク）ニハかくちいかと云
又片口（カタクチ）ハ半（ハン）ともいふ 何（ナニ）ともそこぐいふ
上品（ジヤウヒン）ニて又鰯の中（ナカ）ニ小（チヒサ）キを小（コイ）

をこまめ云お神後更の法師みそ千鶴
云仙基そてひいこ云伊勢伊勢出雲又更別
の門そ田沙そ子ごまめ人云ハ春の婦
春の始そハ仔鹿又ハ田つくりをあそ唱そ移そ
仕そ是ハ指望を持ちお書そ千鶴千鶴若
そ初そ田つくりの名有そ云りそ今ちうちお
大ぞ行鶴の手そちめのそ出ちそこと
云そむそ小誣そち俳人あり夫ハこまめそ儀みて
仕也運送そるのそ説と有そ元旦の

或そ月雪の時なそ
そおより俳そ
の如

問ふもそこそかしこのまうや
答ふのまうハ生の海鼠そう筆へかしこハ
乾そや海鼠そう筆へかしこハ
今年ハ山そ栗出そ
そう成黒そて今海鼠そうみそこ
とひそるも事いきそてかしなみの名
あるみこのそう云そ推て知べし唯

こゝにいふ本稱は生干(セイカン)䕸(ガウ)といふ
とて生海鼠をいりたるものをいふなり
されハ海䑕(カイソ)と書ハ俗字にして正字にハ
あらずとなりとこまかに見えたりいふハ古理
ゆへしかれバ江戸にハ正月中の喰摘(クヒツミ)に
かしらと用ひきたれ共式礼(シキレイ)家(カ)にハ重く式あ
りて田作(タツクリ)俵子(タハラコ)数(カズ)の子をならべて摘
合せ年中の田作も俵子をも一物とせしハ
いかでか式にて干(ホシ)海鼠(コ)を用ひや滞名ハ
沙噀(シヤソン)といふ又海參(カイシン)と云五雜俎曰其性(セイ)温(ウン)
補して人參に敵するによりつ
て海參と云とあり沙蒜(ヤザニ)塗筍(トシユン)なといふ
別名なりけりいつもを大坂にてハトラゴと
いふ俗説にまして正月ハなまこをくふ
唐津にてハ西月十五日前をさかりとする
として歌はれるなり正月の中ハ食せざる事
なかり老師必大か沙噀の和名をたてまつる
ごとくよし此のつゝも田作しあしく俗なり
ありま　俳諧師の物産と本草者流
の物産と精粗て彼懸隔の事遠けれ

りのこ〻ハ魚舗(ウヲヤ)あり手料理を賣ものゆゑ正月朔旦の料理もきんこ干こゞめりの類なり
田作ゝ同じ
生海苔(アヲノリ)ハ山井水ある所ニ非ざれバ出ざる故ニ海藻(カイサウ)の部ニ入
問海苔ゝ書てくゞめ別ニ正月ニ用ゆ
答正月ニ用ゆるハ青苔(アヲノリ)ニ雑記ニ水母(クラゲ)ハ第氏雑記ニ水母(クラゲ)ハ東都(トウト)新語ニ海蜇(カイセキ)ゝ云ハ泥海(トロうみ)ニ生ずるもの故ニ海藻の部ニ入

筑後ゝ有明海ニ生ずるもの一名ミヅクラゲともいひ又ハ泥海(トロうみ)ニ生ずるゆゑ泥海(トロうみ)ともいふ
品川の海苔ハ第一ニ名産なり
ゆゑニ是ハ乾海苔(ほしのり)ニ入
平ニ暗(クラ)き所ニ置ハ水母(クラゲ)ハ腐(クサ)りて爛(ハラ)ゝ如くニなるものゆゑ名づく
是ハ是ハ云ゝ事ありてけしの様ニ上ゝ細末(こまかく)ニ海老(エビ)ゝ様ニ作りて食ものゆゑ名づく
水母(スイボ)ハ敏目(モク)ゝ様ニ作りて食ものゆゑ名づく
入時(レハヅケ)ハ第一ニ漬(ツケ)ものゝ様ニ作りて食ものゆゑ名づく

擢(ナラ)を云ふ又本州より海蛇(カイジヤ)を云海月(クラゲ)
介(カイル)を総(スベ)て魚(ウヲ)を云ふ
和名抄(ワミヤウセウ)に雲陽(ウンヤウ)雑記(ザツキ)を引て一名(イチメイ)海鏡(カイキヤウ)は和名(ワミヤウ)抄(セウ)に一名(イチメイ)いもがい一名(イチメイ)海鏡(カイキヤウ)の如(ごと)しと云ふ
一名(イチメイ)ふくろ貝(がい)と云ふ唐船(とうせん)に積(つ)来(き)るあり圓(まる)く
光(ひか)りありて透(スキ)通(とを)るもの之(これ)を名(な)づけて灯籠(トウロウ)を張(はり)て
合(あは)うの窓(マド)を残(のこ)す又燈籠(トウロウ)に用(もち)ゐてまがいと
ころ〳〵貝(かい)の名(な)あり和名(わミやう)抄(せう)に水母(クラゲ)は水正(スイセイ)也(なり)と書(かき)て
くらげハ水母(スイボ)の仮名(かな)也(なり)と書(かき)そこ〳〵す

向(むか)ふ山井(やまのゐ)よ江鮭(えさけ)と書(かき)てあめのうをと訓(よミ)を
付(つけ)られたり事(こと)の所〳〵出(いで)もや
答(こたへ)あらんをハ神田玄仙本州或問(あるとひ)よ鮫魚(ふか)
或(あるひ)はあめのうをと訓(よミ)せしハ強(あながち)非(ひ)にあらず
雷(かみなり)魚(うを)と用(もち)ゐるものありあめのうをハ二種(ふたしな)あり
江別(えべつ)鮭(さけ)鮏(ビワ)湖(こ)産(さん)なる処(ところ)白(しろ)きもの味(あぢ)白鮭
に劣(おと)て雲石(うんせき)人(ひと)食(くら)ふ(ハ)ことまれなり
青鯨(あをくじら)よ完(まつた)く背小穏(せなかおとなし)くしてあめのうをと云
ふべきなり又場(ば)をもて湖(みづうみ)と云
ふ是(これ)その湖(みづうみ)をもて称(しやう)

江雞の事を見いでゝ杜撰の書
問海老(カイロウ)成(ナル)を以て割(サク)まで而已(のみ)や
答佐官之(カ)雛(スウ)と書正字之雛(カ)ハ漢書注解也海老の如(ごと)き海雛(カイスウ)と云ハ
江雞注解也の事之(カマクラ)倉注解也(ごとき)
事の如(ごと)きもの也(なり)此(この)外(ほか)も此(この)ものハ注解也(なり)
多(おほ)くハ云(いふ)に及(およ)ばず一切(さい)の書中(ちう)
皆(みな)ことごとく注解(ちうかい)也(なり)多(おほ)くハ注解(ちうかい)を称(しやう)して
注解(ちうかい)と云(いふ)ものや
答(こたへ)旨(むね)を注解(ちうかい)に取(とり)て俳諧(はいかい)に用(もち)ゆ
注解(ちうかい)ハ俗(ぞく)の事(こと)を記(しる)すにあらず
問正月の事を以(もつて)幸(サイ)蝶(チヨウ)新(シン)歳(サイ)と云(いふ)ありて後(のち)ハ
答(こたへ)總(スベ)て分明(ぶんみやう)なるべし然(しかる)を
十年以前(いぜん)の書(しよ)に若(もし)此(この)事(こと)を
物(もの)の名(な)もうろ覚(おぼえ)にて古(いにしへ)の
もてなし俳諧(はいかい)の事(こと)迄(まで)明白(めいはく)たる
さだめのあるべし 又貞享元禄の時(とき)
もてはやしし百年(ねん)餘(よ)に云出(いひいで)し

巻き法螺貝の通稱ありて漢土にても螺類数品有
と云螺ハホラ介を訛りて螺ハ尾の老介蛤ハ
両方より合せるる介數の多き介貝ハ甲のあき介の
通稱ありて又無對介といふその有佰にて介
とす數一和名ハマグリといふ車螯又
車蛤と貝ハ貝子と云て子安貝を以て長と

ゆゑもせぎこありのあり幸螺者とりまれを今
も給て物を人ありれハこを兎く松も新り
是と定めぎこしも幸螺と書てにしと洲ぜーハ
本名蓼多螺とりふそのみーこそ又辣螺とも
いふ蓼多も辣もさ貝の腸ハ味ひ苦辛ありふ
あくありにしの數数種ありにがみーとりまれ
則ち幸螺のこと又あらにしも海みーべはし
あがにしーみがにしーまろみーまきにしーたみー
いわふーあどの數みーこそ惣て螺數の惣稱を
みーと云ハ日本れたる音にして螺とりふハ尾の

無對介ハ石決明(アワビ)をいふ
との八式の料理献立のうちに辛螺貝(ニシガイ)盛
ありて螺ハ石ころ貝なを用ひる由友人仲田
惟善う話ありし薬をするに此貝盛といふものハ
祝儀の式小用ひてもをゝ〳〵多重
なるものなれバ是式かゝて螺ころ用ゆる
をかゝ一番と云一ツ物と書たる小石ころ貝を用ゐるに一式の料理の内に
ゝの螺数の多きを推(ヲシ)知ることなれバ何ほどもあれバかゝる所の式家の法を

永山屋時代の伊勢小笠原家の式家(ヤカタ)撰(セン)せしもの
ゆへ多くハ古式と知るべし一たゞ螺(ラ)
書ゐるにハ物ゝて通用せし後ゝ
好事家ありて文字を加へ
たるものゝ多きゆへ撰(エラ)ぶ時ハ口達ゝ貝
貝ゆへ事ハ伝ゝ口達ゝ貝ゆへ
螺青ハ多く奥盛(カイモリ)の貝ゆへ
それも此千の事ゝ介ハゝ貝あるゆへ
ゝにあるべし

魚鳥野菜介の肉を煮て手懸肴といふしあり
座しきハ書式を略用して通しておく肴と
称せしものを云ふ也今ハ是と催馬楽(サイバラ)の酒の肴に
あかまありしかびきとなりれまんとならび
しかるを介肉を肴に用ひ申事ハ古きあつかひし
ことなりとぞまうすべし肴の口取やまとり
是も手懸肴の事也雉をもちゐる御の
立(タテ)て用ゆ中にもあらふなめてのまき
書く出る事ハ塩山井あつからそれを蓬莱
かざるなりその中にかうれハかざりの二ツ

田つくり　おしいはしるさなのハ昆布　ぞうに　かんざう　かやく
いちご栗　柿(カキ)橘　梅ぼし　むめぼし　ざいく
柚をいへバ柑子橘なと也
野老(トコロ)　秋のこゝろもちぎるなとくぐえ日なり　新年を祝ふ
なり肉に考ぶるべきハ蓬莱のかざりに合はせ
此らの事ハ肴にも会用ハ縁起まで
を飾(カザ)りとの肉を嘉(カザ)るときハ今の八切熨斗
鰒(アワビ)をかざりて見ることをもて揃いれハ祝儀の
式肴にて三種肴にて熨斗昆布(コンブ)をもめ
に紙にて肴見まるかさく枝ののしし肴にて
かくハ熨斗(ノシ)　肴(サカナ)ごとくかなるなめの古くある事也

にー者の器(ウツワ)よく納(オサ)まりて二ノ膳の音通(カヨ)ひて
雰囲気(フンイキ)さうなるを精進(シヤウジン)といふ
ものくいろ〳〵のー者ハすりこぎ鉢(バチ)
井ーハ跋(バツ)く寛文三年と記ーそれハその頃
こにー者の称ハ行(ユキ)かへる(カヘ)ものくこれハ
しも知る通りくいろ〳〵の雑菜(ザツサイ)を飯(メシ)
なくくこれにー者の称ハ実(サラ)にもの
謎葉おうそ命(メイ)ものくおん元日のほつくひのこと定
ゆれるくさんだうの

也地を用ひずして漁人利便を貪(ムサボ)るなり

等を用ひて漁ること

くハ能ともきこえたり

譬(タトヘ)孔の式みたるもの

跑の底ひらなるを

つゝハ肉の多きものの

ある如くに作りはめて

ず尾の曲つゝをおし

もぐきかやうに活(イケ)

かくまかりの方(メ)に筌(デ)を出(ダシ)

又延喜式に所載(ノセ)る事

今云ふ鱒の事なり伊豫の長鰒(アワビ)と云ものあり

問季寄の中に江鮭(エフナ)

佳ㇺ鮭のごとや

答其(ソレ)ハ鮭(フナ)の類(タグヒ)なれバ可(ベキ)なり

一名蛇頭魚(ダトウ)と云 餘(ヨ)志縣(シケン)鯔魚(ギヨ)と云ものあり

漢名も和名も大小にかゝはらず数名あり牧拳(マイキヨ)

なるものハ日本紀(ニホンギ)の口女(クチメ)と云是(コレ)甚幼生(ヨウセイ)一すぢ

なる成(ナル)江(エ)をみてこれを云かゝるそ

五位ノ下ニ叙シ給フ云々別シテ是ヲ鹽幸ニ
シテ銘ビシ事ト傳同書ニ出ヅ
アルソノ状ハ
ノヲ云勢名抄ニ鯊(クハセ)ト書ケリ八四寸ヨリ上ヲ云捕ルヲ八四寸ニテモ
二月十日ヨリ洌(スバシリ)走ト傳ヘ十日目ヲ
ハ
ヨシ意舟ヲ
ニ網ヲ張(ヒキ)リ
取方囲ミ
ハ名産(サイ)
ナリ 漢名鮭魚ニ云 九月ヨリ泥味(ディミ)ヲ

本艸小李時珍の説ハ海濱ゟ出る鰹と
いふハ勢州鳥羽ゟ出る海鰹又鮫
よ勢ゟ出るもの〳〵云ふ上古くハ
魚ゟ魚ハ名吉の音を用たるもの〳〵
なりめ〳〵ぎもと〳〵ハ
土佐日記よこ〳〵の門の西ゟ一のかゝらひい〳〵
ぎ〳〵と書とも若し〳〵ハ
再ひ〳〵と仮名も有へし
ゟ〳〵の門ハ小松の門ゟ
換喪

扨此字多年の間ゟ鰹のかゝらを
ずゐ色ゟ〳〵ゟんを取ると字多延喜
廿朝ゟ仕へ〳〵ゟまつりあきハ本説ハ未詳
ゟ屋〳〵ゟ書つゞ并後〳〵て江納
ゟ〳〵ゟ二品ゟべ〳〵ハ夏季
江納ハ魚ゟ鮪をおゝ〳〵訓ます
萩のゟん浪速江納ゟ伊勢の鯉　宗因
笠ゟ〳〵ゟ和へ〳〵
ゟて江納ゟ称ゟるものゟ又ゟの
ゟるものをゟの義内ゟそゟて江納ゟ遠へを

まんどめのごすごとをもとづくもの三種の魚
一類ごとの異種ごとのもの形狀相似(カタチアヒニタリ)
おのおの述(ノ)ベあるごとくこれ傳(ツタ)ヘ聞(キ)ゝ
のみあるもの
鬥鰱(トウレン)鰱(レン)ごとくよくものを
言語するごとく邦俗の書筒(ツヽ)みごとく書(カ)
出(ダ)すの魚等を見(ミ)ざるごとし
字書(ジショ)に出(イ)でざるものもいくばくの魚
もあるべきなり
寧波(ニンポー)府志(フシ)に出(イ)づる所の名(ナ)鯊魚(ロウバ)一名(メイ)綫魚(シエン)ごとく

又呂都(ロト)賦(フ)に琵琶(ビワ)魚(ギョ)ごとくは其形似(ニタリ)琵琶(ビワ)に
形(カタチ)似(ニ)たる名(ナ)なるべし
附(フ)録(ロク)ある名(ナ)もまた参(サン)考(コウ)すべき
問鰷(モンテウ)をあやまり訓(ヨ)む事を詳(ツマビラ)かにせず
ゝ
蒼(ソウ)朮(ジュツ)ごとくは和名(ワメイ)やごぼうと云(イ)ふ草(クサ)をよく
蒼(ソウ)朮(ジュツ)おけら疑(ウタガ)ふべし蘭山(ランザン)
荊(ケイ)芥(カイ)あぶらなやごぼうは魚(ギョ)肉(ニク)の
大筒(ダイトウ)蠏(カニ)ごとくあるものをよく吹(スイ)
大筒(ダイトウ)ごとく吹(ス)出(イ)すのごとくなれば此魚(コレ)の口(コウ)此筒

大吹州のやうに長きゆへに名付たるなるべし
鮹をたこと訓るも古事ハしるべき信有あれども
見るやかの人の形状を誤りてなしたると
訓せしに多く成りのよふになりし大なるに
誤りなる事なり たこハ藻名章魚といへる足なり
又鱆魚とも書するも事なきれバ鱆の字を通用
のみ字に用ひ難きものゆへ 鱆 鮹 音通なれ
文字也 鮹ハセウ 鱆ハシヤウ と読ミにても拝彰多し こたび
此十月比多く京師に出まる足試十夜鮹
といふ 東医宝鑑の小八梢魚也 又絡蹄といふ

一種足長だこと云あり 一名手長だこといふ
本草集解に云ところの石距之一類にて足長鮹ハ
蛇の化したるものなりと 足七本あるなりと云 雲母
及銭刻なく八本ある蛇の化したるものなりと云
蛇のたこに化する事ハ対て多しと説前
まそハいふ あこの九足あるものハ蛇の化したるものなりと
そういふこのたこハ海頭の和名抄にも貝鮹といふ
是閩書に所出の鱆魚一名望潮魚之一種
なるが あこといふハ あこに似たる故なりし足細長く
して蜘のごとく 丹州但馬越前加州に多し

華夷虫ク魚若シ無籍便覧ホ〻いの爪の望潮
一名塗土蟹ともいふ形ふりの異ふいてだこともぐ
雌雄ありて云説あれど固ゟりてあき爪あれば
別性ありや勢州津ゟ〻あるだこと云ふ
あり形小さく〻して飯だこのめく〻まだ飯迄
毒ありて食ふ人を斃ます〻いふ又章魚
と共煮ふ人蘿蔔豆を二三粒入〻煮る時ハ章魚
故ゟ小毒〻あるものハ赤豆を用て治すべし
又溲疏を入〻煮る時消化まと云〻さ毒に
中ふる者ハ溲疏を用ふ治すべし

警斛山田ふてハ章魚ハ春ゟ初夏乃ち秋ゟ冬の時章魚
食ふまと章魚ハ春の茶と云ふり蔓山葡萄の
説ふ又飯だこハ江戸にて摸物ふ〻多ふ〻真腹閉ふ白茶飯のごと
ふきりの充満ま爪〻倍ふ飯たこと云ふ
煮食味美ふ十二月ゟり出ふ〻塩中ふ鹽也
三月にいたれバ味頗ゟ劣ふとふり糟藏ふ
又ハ魁にし〻りの〻ふ〻遠ふ〻送ふ味鮮ゟ
ふり〻勝ま爪里又大章魚ハ一二尺にして
雞犬を捉食ふあり人牛ゟ捕ふもの

若和加舟等也乾おハ尋常(ヨノツネ)の小なるもの
にて皆大足のものにてよくつり荷ひ
ぬこみて遠く送るに俳(タビ)〻不用なれど
重きものに用ゐる
問聿魚壺(タツコツボ)といふものや但莉(ツミ)
句にも鰹壺(カツコツボ)やうのものよく氷或夏の月と
ありまた詩の料(ザイ)ともなる事にきまり
答たこ壺とてもありめいが言所(トコロ)かぎり章魚ハ
多く播州二見浦又摂州兵庫(ヒヤウゴ)などに
造るものにて無(ナ)き所にハ漁(リヤウ)せず梯(ハシゴ)
ありて法
或ハ長き麻(カラ)麁(アラ)の糸(イト)へ紙(カミ)捻(ヒネリ)を
もきて強(シヒ)て数撥(トウガラシ)をおし込(コム)てよく
沈(シヅ)めて置時ハ必ず章魚(タコ)壺中(ツボノナカ)へ入(イリ)て
出(イデ)ず陸(リク)へ引(ヒキ)挙(アゲ)ても動(ウゴ)かざるもの
指(ユビ)を以(モツ)て壺の口(クチ)を探(サグ)るときハ彼(カレ)
等走(ハシ)り廻(マハ)りて壺の底(ソコ)に久く留(トヾマ)りて
外に堀(カキ)売(ウリ)及小舟(コブネ)をも多く着(ツケ)て異形(イギヤウ)を
なす好事(コウヅ)の着目(チヤクモク)て花瓶(リンヘイ)とす薩州
にて磯物(ヤキモノ)壺(ツボ)あり

大孤(オホコ)ひとり是を乗(ノ)
る事(コト)ある事(コト)なし故(ユヘ)に孤舟(コシウ)蓑笠(サリフ)翁(オウ)と
祖翁(ソオウ)の句(ク)ふかく自得(ジトク)し
給(タマ)ふと知(シ)るべし
命(メイ)も捨(ステ)ず名(ナ)も又(マタ)去(サ)らず
老(ラウ)の来(キタ)るも又(マタ)しらんと
益(エキ)なく美服(ビフク)美味(ビミ)も童子(ドウシ)の
黄泉(コウセン)の客(キヤク)をおうがごとく
なりと勧破(カンハ)せしも
用(モチ)ゐの月(ツキ)〳〵称(ショウ)
事(コト)もあるべし
りの寂(サビ)しき浦(ウラ)の
ある趣(オモム)き元眼(ガンガン)の
紙(カミ)おきうるまじ
うく懇(ネンゴロ)に
破(ヤブ)りすてし
かうの子(シ)の俳諧(ハイカイ)
雲泥(ウンデイ)汲(クミ)おく違(チガ)ひあり
清原(キヨハラ)の深養父(フカヤブ)

大孤ひとり是を乗ることある事なし故に孤舟蓑笠翁と祖翁の句ふかく自得し給ふと知るべし
命も捨ず名も又去らず老の来るも又しらんと
益なく美服美味も童子の黄泉の客をおうがごとくなりと勧破せしも用ゐの月〳〵称事もあるべし
りの寂しき浦のある趣き元眼の紙におきうるまじうく懇に破りすてしかうの子の俳諧雲泥汲おく違ひあり清原の深養父

菱は葉もまた
こゝの月中ゟ初て
葉の粗(ミジカ)くて色あ
雪(ヨヒ)こゝのしくたゝ
半毛おいまた
まバ葉もたゝ
夜ハ閉きに月
ちむこゝあ
浮云を訳(ワケ)
菱の月待添し
当一ゝ白俗ニ八古人の意ニハ違(ソムカ)ふかや
四ゝ
問菱事ゝ清汰(サハツリ)ゝ
訓ゟ正事ゝや
答ゟ書ゟ温
本艸ゝ青魚ゝ
まだきなふ
ゝゝ朝鮮ゟ
ゟ云角ゝ藻玉
遠ゝゟの事

鯖(セイ)の字さバと

青魚ゝ云ハ和名カド

東醫宝鑑ニハ古(クハ)青花魚(セイクハギョ)

清侯(シンゾク)

かぐハ一名ふぐと云又高麗(カウライ)イワシと云東北海
の産にて南海にあり一数のつみハ汁ふぐんの
ふぐ鯖(サバ)をさバと訓ずるハ正字ふぐハ誤紙
作ふくと仮字を用ゆ又数のつみハ邦俗
鰒(ふく)の字を用ゆハ非なり出るゆへの義ふくへ
より呂氏春秋に魚の美なるものを海の魨(ハリ)と
いふハ数のつみ事を云ふくや魨(ハリ)ハ魚のつみ多き
ものを云ふ魨のつみ数のつみ数より又かぎの
ふハかぎのつみ数(テンゴ)ありと後漢書にあり
今世俗鰒(トウキ)魨の字を用ゆ

又ハ鰒魨(テツ)とも書又魨の字をふんと訓ず
ぞまた正字にあらず魨(テツ)ハ鮎の
稚数(アユ)ものつみ一魚を食経小鮎魚と出せり
りの穏(うるハ)にて穏(うるハ)ハ正字あるものや
同白魚も俗字ゆえに正字本経逢原及養魚経の
蒼鱠残(メイザン)魚と云是なり
銀魚(ソウギョ)ともいふ通雅小水晶(スイショウ)魚と出せり
おもふにきみの字ハ雅文字なれハ雅の通用
詮(セン)なし魚ハ通(ヤス)き従ふべし

菓山菊水晶魚をまた
とも魚ふりそれ同名アリ
多く取ては紀列熊野を過て
三角の形にして甲羅ありて乾(ホシ)ものを
いさぎの貝紙貨(ソラヲ)にて
いと小さき魚のごとく
おき紀星(アイグイ)お對(ツヰシ)て
一數あるものにて七ツあり全く白魚と
ひとしきもの也大坂にてドロメともいふ魚の
是なり也筑紫(ツクシ)にてハドロメ共ふを白魚ト云

京にて白魚と
武州・両毛川を名産とす尾去沢にて白魚
ともいふ和名未詳
問濛(サ)とも訓ぜり数句(ハゼ)ともいふ
尾の白きもの也
答西宇ありて久しく像(カタ)ち更に改
むべし是も古人の筆也と訓ぜり
いまだ正字なり
蜑苑(イエン)許註の蝦虎(カコ)魚とは是ニ濛ハ和名

うはづり（南部方言） すなやき かんぎなど 南部にて
すなもぐり 仙臺にて かまつか 津軽にて
あぶらこぜ 和泉にて すなめち 江州にて
すなくゞり又すなほりと云常（ツ子）に渚（シヤウ）沙上（サシヤウ）
に伏す事にて紙張りて沙を吹く形ちはぜ
に似て頭大（ケタ）にして細く尖（トガ）り身長六七
寸細なる鱗（ユリ）ありて淡黄に黒き紋筆と傳
通り黒き斑（マダラ）あり俳もち杜父（トフ）魚鰕虎（カコ）
魚溪（サ）魚魚ハ一類別種なるもの也形も大低
似よりてわかつの違（タガ）ひあり味も似よりたる

ものへき種ハ古より鹽をちぜと心得るな
ともばなり又ちぜ紙西国なくハちぜなり
と云一名ゴス仙臺なくしウミカジカと云
同 鯊（サ）をいさゞと訓す正字なやいさゞといふ魚
ぬめあるをそのなや
答 鯊ハ和字也漢名に鮴といふハ鰺（サン）の事也
いさゞといふもの同名ありて鱖（ケツ）魚のいさゞ
麪（メン）條（ジヤウ）魚のいさゞあり鱠魚ハ也するもの紙
いさゞと云此いさゞの乾（ホシ）たるもの紙ちりめん
ざこ又志らすぼしと云又きさみいわし（江戸方言）

ふくめんいろ〳〵の児あり〳〵云
摂州にハドロメン〳〵云ものまじりもいるべくや
ふくまぶし〳〵ハ漢名鵞毛脛〳〵云又麩條魚の
いきぐを乾〳〵かもめ〳〵す〳〵云腹〳〵小黒
の奥左右にあるりのはいきぐのまろ
き〳〵をもつ黒奥をも〳〵まき條腹内〳〵透て
見ゆるものハとろめんいきぐかもめ〳〵て鯛魚〳〵
摂州兵庫にて〳〵魚の赤小布細を沿〳〵
取る長サ一寸許水中にあり〳〵手にて取を見
ず但目晴の黒きの〳〵又麩條奥ハ江

の白奥小なも近きよりよく〳〵頭背らまで
円く〳〵て鱗の数のめきを異あり〳〵す
麩條ハ〳〵ハまろうをも〳〵云肥前に
うるハまろうをも〳〵云長崎にて又いきぐ
氷奥〳〵云勢州〳〵そふびよごと云常別土
浦にて〳〵ハまろうをも〳〵云ハ小奥の
白色ある通称〳〵加る事〳〵いきぐ〳〵もと
まろきいきぐの通称〳〵稱ち中ハ麩條奥のいきぐ
も三月海より川へ多く上るを業(ヤナ)にて〳〵
取る性死〳〵難(ガタ)〳〵故ハ湯(ユ)かけ置て

夏る四月ノぼハ絶て無し丹後田辺ゟ
上已の頃海ゟり川へ上る処ゟ方言
やとりいさゞと云ふ是ハ海水ゟ生長する
ものゝいまだあり又江名和ゟ取り来ル
ゟ山もいさゞ形状海湖ゟゟ大同小異あり
の名産ゟ是ニ和ゟ氷魚ゟ云
きれど大低ハ冬ゟ春ゟ取るものゟ
りのゟきれバ雲州みてゝ勢水魚ゟ云
是ハ淡ゟ産ゟて江名の出魚ハ湖川ゟ水
の産ゟ和ゟ取るものを一名サノボリと

いふゟサノボリゟ云ハ湖ゟより川へ上る時の
名ゟて又サカノボリゟ云の省語ゟり雲州
丹石ゟでゟそのハ海湖を通論長ゟて川へ上ゟ
ゟる之總ゟ海湖ゟ云ハ大河へ
魚ハその原籍同川流ゟ生ゞて次第に
ゟりゟ海湖ゟ長ゞ又川へ上りて卵を遺
して終ゟ鮭香魚ゟ類推ゟゟ知ゟ
氷魚もそのゟゟ川上ゟ生ゞて湖水へ下る
時ハ細代ゟりゟゟ網代守ハ
延喜式ニ曰山城ゟ宇治近江ゟ田上氷魚

細代者一処九月ヨリ十二月ニ至ル
まで是を貢ものとす今ハ細代ハ
うつ華九月九日ヨリ始るゆへ細代ハ
おもハ川の早瀬ニ皮付の杭を上廣く
下狭く左右ニ多くうつべし其下の狭き所ニ
細代ものを掛ハ簀火をたき川水
のその杭ゟ中へハいらぬやうニ入るべしかゝる
魚の簀の上へよりくる氷魚を取ものと
なり和名鈔ニ鰷魚音小今俗ニ云氷魚
是也初學記ニ冬ノ事ノ對ニ雖有氷魚霜鸛之
文而尋其義一非也白キ小魚ノ名也似鮎魚長
一二寸者也くわしくハ吾邦の文字ニハ
多しかゝびれバ
用ひるものなり按ニ彼國の文字ニハ
產大同小異ありて一概ニハ勦勦
又勦のものハ杜詩ニ白小ゝ
のものゆゑ氷魚ともよめり考ニ
形狀詳ならず勦の字和藻同魚ともや

大坂あたりにコアイと云もの是なり是
志ゝもぼゝあたりにてもあゆと親(トク)しく海湖(カイコ)
川中の小魚とりわけイサゞハ別種なり海湖
麁條魚(ボラ)なり魚(ナヨシ)唯(ツヾマヽ)淡水産と鹽水(エン)産の
美別(ベツ)なるのゝ江戸辺鱠殘魚(シラウヲ)ハ又別種と
氷魚ハ宇治川田上(タナカミ)川辺江の湖ゝ野川
あたりにもあり氷魚勢同種にて古今
産所かよりて名を異にするものゝ如し
又産所ゝりて形おゝ遠ふものゝ如き
草木鳥獣(テウジウ)蟲魚をいふゝなどゝ人性を

赤美別(ベツ)なるゝ
ゝゝ野鄙(ヤヒ)を恥ゝ國風(トフウ)土地風俗
人ゝやゝゝき萬物の長ゝゝ戒愼(カイシン)す
ゝゝ
問難(バン)をゝゞゝ訓(をしへ)を修(をさ)めや
答備(そなへ)ゝゝハゝゝゞゝ主(アタ)ゝゞゝ
ゝゝゝて和名(やまとな)ゝゝハ石決明(セキケツメイ)
事ゝハ雜(ジフ)の事(こと)ゝゝて和名はやゝ事又細に
尋(たづぬ)ゝハ穀(こく)ハゝ
石決明の一種(しゆ)ゝゝ

ちかきハ大いに齟齬（ソゴ）なるもの之此較ひおかしけれ
ぬぐハ河豚の字を用ひ書し或（アル）病家にて
襟に掛るを医師の方へ問ひ来りしに鰒と書て
げるをしらしきとて下ケ札して挿こせしらバ病人
食せん事を歇（カツ）せしらども看病人（カンビヤウ）うけがハバ
手後医師来りし附めぐハ食しても害やと
尋られハ吸の外なり決て相成ましくと答へられ
しに彼下ケ札を取出しみせられきバ是ハ河豚（フグ）
といふ字にあらしやつがれハ河豚ひと読みて
いれしと是俗字にて疎（ウト）き医師とみへる字

あられバ楮ぶ見しなどの書付ハかならずかうのことやく
うるをにに書べきをまなる之家まなりぬ知顔
にかくしぬ文字を書ちらして過（アヤマ）ちの
出来るものにも心得べし鰒といふ字ハあらび
なりと覚へく俗字にたつさわる医師の
所へ聞ひまんにハかうるくハあらびと読せて
河豚（カトン）の筆と思ふべし時至にまりあれ也
鰣（シ）の字をあらと訓しと読ぞうなも実（ジツ）ハ
貝原氏などの形状註解（ゲ）しあやまりなり
あらと訓をつけあり因て文字にたづさわる

人其(ソレ)学(マナ)ひ[illegible]つゝ[illegible]つゝ[illegible]張(ハリ)[illegible]
[illegible]り俳(ハイ)学(カク)[illegible]ハ此邦の人の創(ハジメ)[illegible]
学(カク)ありとハ外(ホカ)[illegible]る品もなれバ陸(クガ)[illegible]
いて[illegible]唐土[illegible]も[illegible]
[illegible]物の名目[illegible]
[illegible]のもあれバ[illegible]本邦[illegible]
[illegible]
俳道の学(ガク)文(モン)[illegible]
[illegible]べ文(モン)言(ゴウ)[illegible]
[illegible]

[illegible]大功(コウ)[illegible]
[illegible]
[illegible]

予う空下に列るうもせの流れ水あふ
て十ふる六ハひの秋雨ふる朝雪
ひ氏歌くてふ
夜ふ長ど安く風ハ朝日にあく
霜のふ北ふれうあるひハ山ふ
ふもとをゆふ猶前の一句をおひ解ふ事
ひふたびふて已レ多年のつひふ
ふたび一年ふ事口ふ仏ふへふそ
ふく句の善悪を知ふる事あらんや

初心の已レうき句ハ必ずあしき句と
ひふきふふ句ふ却てよき句あるもの也
夫ふ句の丈已レに至てぬれハふ事
ぬふく十年二十年の間句作を学へふ
ふも師傳受ふ者ふ真をうる事
あふたびすふ初んのうれふ者ふ
人ふくの句を誹ふ又ハ学ひ得ぬなどひふ
ひふきふやハ道の魔ふ也
事をふくひべふたび修行の軌ふ事
物を捨るふとたび蕉翁の風ハ十うて豊へ

乃ち知る毎一大防と蟻穴より崩れ
ます〳〵手予う微力よりつ〳〵崩れ
こゝき邪風を防ぐ〳〵崩れ
せしまゝ浩然の氣を養ひ
ぐうこまれど二三
ぶらぶらかゝ
蓬莱の風流
墓嵐去丈う風
も巨雄〳〵

蕉門の俳士と称して蕉翁生涯の事跡と示されたり其くだ
り風流を戒めたりと書留をけるは
記して後学の俳諧を誤ること多識ならん
餘毫(ヨゴウ)歯(ロ)茅(モウ)すべきものと誹る事なかるまじ

春

雪ながらに咲て新年梅の風
雪中に春を待たる梅のさま　武大森(ブタイシン)
春もやゝ気色ととのふ月と梅　梅志
梅が香にのつと日の出る山路哉　花外
うぐひすの笠もとるさへ梅の花　昔居
うぐひすの鳴つゝ梅をこぼすなり　梅路
梅咲つゝ我も我もと入る門　豆麦
君が代や幾春経ても梅の花　菅子
梅が香にそれと分ばや軒の垣　杉二
梅薫　武大森(ブタイシン)

正月着

柯左
古流
琴呂
玲樹
石川
桃二
駿府
木冊
青亀
也哉
如珀

さいう
武町谷
三巴
花笑
武町谷
東江
對山
氏人
春葦
璉柯
不老

博一番るうそて再まい帰ます　京　譽太

原野迷岐路

るうまね董帰しむ日ぞなや　素一

ちよと日山桐ら花ふきりふもき事　ち補

孫名のる動く桐ら　流志

出代や二すそ新ら紙ぞ　春山

出代や新く消の二日ぬり　越高　蒼亡

ぬれくて明ま遠し蘇の花　亀文

もの当ぬ春の名ぬを袖ちこ　秋武

り春や桐も着見竹　嵐蛙

夏

朝日の影まき六條く待て

朝も又門係りれ　李水

世ら業ふつうぬ再やおくきた　柏儀

涼の碧ら板東川　勢楽名　一柳

治聲酒ハ井も雑ら部一ス　文之

おまさくも陳くもうへ海まりり　さいう

二三寸魚ハ容ら魚馬　ち補

灌佛や茶り蓋も二茶ちり　武三川島　黒作

涼青ら又てまく係ふまるり事　秋九

鶯の二の声を聞道
我そこ〳〵ゆかしき一湯のうち　京　吳星
行〳〵まんと思ひまして　雪ふきやみ　赤丈
世の中を更て雪の朝のうす　梅渓
鬼百合の雫〳〵ゆかしき旅藁山　勢　桑名　靜月
約束〳〵月をたゝふる砧哉　今　潛梅
世界ひろし月あれど栗疎ふ蟲寒し　武高輪　扑二
照り合て雪ふまよふ音もなし　自適
ふまれて居さへうるさかるなり　後卧
立の雪雨吉ふりかゝる　萬舊

いまつさき杉を植をく
早ふまれや豆腐売行く雪の朝
ふみ違や笹の枝折てうら一むら
鴉一ツ的残の縄巻きれぬ書
ふむつゝ出されぬ雪の壇の石
春うらゝやうそ風の駄へまる
表かりて垂てさく桃のつぼみ
蚤色〳〵大悟のうそ鳥
西一きり降置ときめる花柚哉

秋

杉二
山霞
桃月　女　可昔
梅居
仲亭
如翠
百歳

神くやうに社もや行く雪
志ゐるゝと頼ける雪の世の池
雪の世ゝをゝゝゝて行きさりとて
辞るの宮しい深きや井戸の春
きよみ申山あるゝ

ゝゝゝゝ八百千松の雪　勢藥名　霜龍
年暮の掃除をやめる秋の月　未学
銅猪の屁ゝ秋を掛ける　琢却
まゝゝゝゝ嵐ゝ年の老　窓月
玉取一蹄や葬ゝゝ　武町谷　青峰

る市戸の遠くしく　都雅
巴ゝま雑誌のゝ　翠雅
窓一性をあつゝて　さいう
大名ゝれ一弥やゝ　井二
等ふきのゝ秋うさし　秋の風　尼　琴笑
地獄のうゝゝも　勢藥名　完和
廉ゝゝ降ゝゝ　ゝ　ゝ　黙存
月影ゝゝゝて秋の　花朝
こんな日ゝ事ゝ　杆交
闇高うゝよ秋ゝ雨　樫窓

陣井
東猿
五柳
如風
松杜
尼
免慳
嘿夫
了浦
可良
柯丈

越前
加金沢
玉渓
墅琴
潮木
蛍沢
菊芽
歌風
田路
尺蚓
浪山
園寿
市就

北風こまきもうこゑ
志ぐるゝおて昔てそ
少仕不のうもこ新し
菓ゐろくものもきお
秋まろく只何もちう
昔くちもも湖きお
おて年今立すの雪や
りまてい松うれまて

冬

秋甘菜のせこも苔毎

秋雄
秋守
笑鳥
亘麥
富旭
在止
柯雪
杉三

對山

都まて二百い春ろり時毎義
岩そる門よ雪暗のゆこそ
ある時を松りれつ
おりつも山茶花ハ
度ゐ成立きて春る
その思ふハ行うまりは
旅宿ゐ事をこ終の
こと月や擱を指まて
お系北柳ろまりめ
思癌の为北思癌や
毒ハ紙

歌葉名
三川島

完和
桂哉
寥松
晴雨
きいう
きい寥
揮月
了補
杉二

天谿先生著述目録
俳諧多識編　杉二　撰馨　全筆記　二冊　出来
同　續編　一冊　近刻
癩痲狂編　一冊　全
詩經品物辨疑　五冊　全
猿簑逆志抜　七冊　全
炭俵逆志抜　五冊　全
五元集小觿　三冊　全
諧語似猫　二冊　全
東都書林　星運堂　上野五條天神前
　　苅屋久次郎板

稚の玉　初雪や　外田の稲　大雪や　多羽の羊　人の代　かうつくし　雪の日　多くて　雫や　温石　きのふ　うき愛　小神　見初て　紙子　小用　鮒の　海音寺　鮒の　俳諧の　春ふかし　稚蚕　毛桃　一翁　玉耳　杉二　赤蕪　存知の　騎竹　菓枝　雪気